

闘志

志を同じく闘う～現在（いま）を生き抜き次代へつなぐ～

はじめに

佐賀青年会議所は1956年に創立され、本年で65周年という節目を迎えます。

この長きに亘り佐賀青年会議所が今まで、運動・活動を継続して行えるのは、未来を見つめる諸先輩の思いがあり、地域の皆様のご理解、ご協力があったからこそ続けられてきました。私たちは今まで諸先輩が築き上げられた多くの功績と、地域の皆様に支えられてきた事に敬意と感謝を表し、70周年、100周年へ向けて、この志と伝統や歴史を継承しながら、「時代の開拓者」となるべく刻々と変わる社会情勢の中、その時代の変化に対応し前向きに挑戦する組織であることが必要であると考えます。

近年、国内はもとより、世界では災害や感染症などの事態により、国民生活や働き方など大きな転換期を迎えていきます。さらにはキャッシュレス決済やテレワーク・リモートワークなどが格段に進み、ライフスタイルや価値観も大きく変化するでしょう。また人口密集地におけるリスク回避、コスト削減などの視点から考え、人や企業の地方への移住や移転などの動きも見られます。

地方に有名企業が進出してくれれば、内需が拡大され、その地域の発展するきっかけになるかもしれません。「人口減少」「少子高齢化」など地方が抱える問題は多くありますが、地方の責任と役割を見つめ直し、安全・安心に暮らせる未来を描き、ネガティブにその未来を待つのではなく、ポジティブな未来を描き、それを実現する政策を掲げ、運動を展開することが大切です。

先人達は戦争や経済危機、自然災害など困難を乗り越え努力してこられたからこそ、私たちが存在しているのです。明るい豊かな社会を実現するために、私たちは再度リーダーとして意識を高め、自身の成長を遂げ、志を同じくする仲間とともに、個人の「修練」、社会への「奉仕」、世界との「友情」の三つの信条のもと前向きな思考を働かせ前進して参ります。

65周年記念式典について

本年9月14日、一般社団法人佐賀青年会議所は65周年の節目を迎えます。1956年9月14日、七田久夫理事長を初めとする55名のメンバーからスタートし、創立以来多くの諸先輩の皆様が地域の為に献身的に運動・活動を展開してこられた歴史があります。周年という節目の年は、唯一立ち止まって過去を振り返る事ができる年だと考えます。諸先輩の皆様がどのような想いで運動・活動されてこられたのか、なぜこの運動が現在も続いているのか。現在、佐賀青年会議所メンバーの大多数が入会歴3年未満です。この周年という機会に入会歴の浅いメンバーに諸先輩の皆様の想いを共有させて頂きます。創立以来多くの功績に敬意を表し、今一度佐賀青年会議所の歴史と諸先輩の想いに触れて、創始の精神が今に引き継がれていることを再確認し、これらを次代に引き継ぎ、70周年を見据えた運動・活動の指針を示していきます。

まちづくり事業について

人口減少時代を迎えて、地方都市では街なかの空洞化や山間部の過疎化が続いています。本年は、1972年に「納涼さがまつり」から始まった、「佐賀城下栄の国まつり」は記念すべき50回目を迎えます。佐賀青年会議所は立ち上げ当初からこのまつりの構築に関わってきました。その中でも佐賀城下花火大会は諸先輩が幾多の困難な道を切り開き多くの関係者の皆様のご協力のもとで開催させて頂いています。本年は、このまつりを開催するにあたり、今一度、行政や他団体、関係機関との連携を強化し、今の社会情勢に合ったまつりの在り方を模索し、50年の節目である佐賀城下花火大会を盛大に開催します。まちづくりを考える上で、観光振興とは地域の資源を掘り起こし、発信していく事だと考えます。地域の内側に目を向け、その地域にどうやって人を呼び込むかという点を模索する事により、地域の魅力を再確認し、地域の外側にも積極的に眼差しを向ける必要があります。

青少年・環境事業について

青少年事業は、長年、諸先輩が取り組んでこられ、多くの子どもたちと触れ合い、夢や希望を与えてこられました。昨年、誰しもが予測しなかった新型コロナ感染の流行により、子どもたちはもとより、我々大人も外出禁止、活動自粛という異例の事態が起こりました。ゆえに外で遊べない、部活動や人が集まって行うイベント等が軒並み中止となってしまいました。成長著しい子どもたちにとってぽっかりと空いた気持ちを埋めるような働きかけを模索し、未来ある子どもたちに元気を与え、夢や希望を絶やさない心を育むような事業を考えていきます。

また、佐賀市には市民総参加型の河川を愛する習慣が根付いています。これは諸先輩の皆さまのご尽力によるものであります。佐賀に住み暮らし、社会活動をさせて頂いているこの地域に対し、環境美化を邁進することで少しでも地域に対しての恩返しになればと考えます。

国際・災害対策支援交流事業

佐賀青年会議所は1985年の正式調印以来、社團法人台南市新營國際青年商會との交流も36年目を迎えます。志を同じうする者同士、国境を超えた友情、さらには諸先輩の皆さまを含みますと世代を超えた交流がそこにはあります。会員同士の交流だけに留まらず、自国、ひいては地域の発信、経済や子どもたちを巻き込む交流など多種多様にわたって行って参りました。昨年は新型コロナ感染対策のため、オンラインでの調印式という交流事業となりました。従来の相互訪問形式とは違った形ではありましたが、今後はオンラインも取り入れ、原型は崩さず、新しい交流の形も模索して参ります。

また、近年の異常気象に伴い、自然災害により大変な思いをされている方々がいらっしゃいます。青年会議所として災害に対する対策や支援の在り方などを模索し、少しでも市民の皆さまにお役立てできるような事を考え、構築に向けて動き出します。そういう運動が世界に目を向けた時に一助になればと考えます。

会員の資質向上・新入会員の研修・ビジネス事業

本年で65周年を迎える佐賀青年会議所ですが、会員数は減少しております。これは佐賀青年会議所だけの問題ではなく、各地会員会議所でも同様です。昨年は、西村理事長のもと、多くの新入会員が入会してくれました。仮会員で入会したメンバーが新しくメンバーを呼び込んでくれるという一面もございました。このような新しい風を吹き込んでくれる事は長く在籍しているメンバーにも刺激になった事でしょう。青年会議所の魅力を語れる、そんな人財を一人でも多く残していきたい。今や、地域には多くの青年団体、NPO法人が活動しています。そんな中、青年会議所（JC）でなきやならない根拠を語れる人財であって欲しいと願います。

また、昨年新しい取り組みとして、他団体と協働しデジタルツール（アクトコイン）を用いて、まちなかを応援する事業が行われました。これは一過性ではなく継続して体を成すものであります。新型コロナの影響で経済は打撃を受けております。青年会議所メンバーとしてもそうですが、いち経済人としても地域を盛り上げて、社業も発展させていかなければなりません。困難な状況下でも生き抜く力というものを私たちから発信していきます。

広報について

現在、世の中はスマートフォンの普及もあり、情報を待つのではなく、取りに行く時代となっております。近年、佐賀青年会議所でもホームページやSNS等を用いての情報発信を行って参りました。市民の皆様に我々の活動を発信し、目に触れて頂くことで得られる理解もあるかもしれません。良くも悪くも単年度制の組織体ではありますが、私たちの運動は65年間、諸先輩の皆様から脈々と受け継がれてきました。こういった運動をリアルタイムに発信し続ける事で、さらに地域や市民の皆様を巻き込んだ大きなムーブメントを起こせるのではないかと期待しております。また、地域の皆様のお役に立てるように、何かあつたらJCさんに相談してみようと思ってもらえるような立ち位置で情報発信していきたいと考えます。

結びに

「祖国日本の復興」を願う、熱い想いで青年会議所は設立されました。先人たちの熱い想いは、時代は変われど受け継がれております。青年会議所として、いま何ができるのか。昨年、第二次世界恐慌とも言われる時代が訪れ、想いがあっても動けない辛さがありました。わが国日本だけではなく、世界が変革を迎える時であります。諸先輩の皆様が常に時代の先駆者であったように、私たちも力強く闘い、現在（いま）を生き抜き次代へつないで参ります。